

---

# 俺が理想の主人公 -魔術と科学編-

いおんいおん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺が理想の主人公 - 魔術と科学編 -

### 【Nコード】

N9247Z

### 【作者名】

ふおんふおん

### 【あらすじ】

他人を庇ってテンプレ的に死んでしまった主人公が、テンプレ的に神っぽいやつに会って、テンプレ的に転生、憑依、などするお話。

転成、憑依するにあたって主人公は力をもらった。

そしてもらった力とともに様々な世界を生きていく物語。

自己解釈、ご都合主義などの要素があります。

当作品はその第一世界です。



## プロローグ

「やっとここまで来たか。いや、長かった、ホントーに長かった。はあ…。」

その少年はそんな言葉とともに溜め息を吐いた。

溜め息はいままでの苦勞を語るかのように深く、重いものであった。

「でも、ようやく始まるんだよな。」

そのように独り言をつぶやく少年がいるのは「学園都市」と呼ばれる場所である。

「学園都市」とは人口東京西部に位置し、東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る完全な円形の都市。

総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人。

そしてその8割は学生によって構成されている。

外周は高さ5m・厚さ3mの壁に囲まれ、完全に外部と隔離されている。

そしてこの学園都市において学生たちが行っているのは、能力開発である。

「ここでどんなふうにやっついていこうかな。並行世界というからにはあいつに言われたとおりには違いはあるんだろうけど…まあ、そんなことは今はいいか。」

少年からつぶやかれた「並行世界」という単語が、この少年が普通でないことを物語っている。

「それにあいつもいつてたしな、楽しんで欲しいって…」

あいつというのどこか遠い所にいる人物というよりは、もっと別の何かを感じさせるような口ぶりであった。

「…まあ、こんなことごちゃごちゃ考えてたら楽しめるものも楽しめないよな。やっぱ自分が思うままに過ごさないと…。」

そうつぶやくと少年は学園都市の町を歩き始めた。

その表情にはこれからへ期待のためか、満面の笑みであった。

この少年、旧名、ひのい日野井 慶けいは新しい道を進み出した。  
これからの未来に胸躍らせながら…上条当麻として。

## プロローグ（後書き）

初めまして、ふぉんふぉんと申します。

いままでは作品を見る側だったのですが、今回、自分の作品を投稿させていただきました。こんな駄文でも楽しんでいただけたら幸いです。

さて、今回はプロローグということで結構短めにいたしました。

ですがこれはこの作品の導入ということで主人公がこのようになつたあらすじを次回、プロローグ2という形で投稿したいとをもちます。

このあとの続くもなるべく早く投稿いたしますので今後とも宜しく願います。

## プロローグ 2

side：当麻（慶）

やあ皆さんどうも。わたくしは旧名、日野井（日野井） 慶<sup>けい</sup>こと  
現在は上条当麻と申します。

自分この世界に来てから15年、ようやく学園都市に来ることが  
できたわけです。

これまでのことを思い返してみると、いろいろ苦労したな〜と思  
います。

なにがあつたかと言いますと右手が原因で発生する不幸の数々。  
同年代のやつからはいじめのような物を受け、その親たちからも  
軽蔑の視線を受け、その他にも数えきれないほどの嫌がらせを…と  
いう具合に本当にろくなことがなかった。

だがそれもここに来たことで無くなる。なぜならこの学園都市は異<sup>アブノ</sup>  
常<sup>イノーマル</sup>こそ普通だからだ。

アブノーマル万歳！！最高？？……

……調子こいてすみませんでした。

さて、そんなことはとりあえず一旦 SO・GE・BU しておいきましよう。

ところで、画面の前の皆様にはなぜわたくしが上条当麻になっているか説明してませんでした。

サーセン。

というわけでここで一度、回想をした方がいいんじゃないかなろうかと思えます。

え？そんなのめんどくさい？プロローグ二回もやってんじゃないかって？

ハッ、いいぜ、お前らが回想も見ずに本編を読もつてゆーなら、

まずは、その幻想をぶち殺す！！！！！！

はい、つーわけで回想です…

…  
…  
…  
…



「あれ、ここどこだ？」

俺が気がつくところにはどうにも見覚えのない場所だった。  
周りを見渡しても白一色。上下前後左右、すべてが真っ白。

というか、こんなとこに見覚えのあるやつなんかいないんじゃないかな  
いかとすら考えてしまうほどだ。

「でもなんでこんなとこにいるんだ？」

それが疑問だった。

だからここで自分の最後の記憶をおもいかえしてみると…

…？そうだった！俺は確か工事現場の近くを歩いていて、そしたら  
突然上からガシャン？という大きな物音とともに鉄骨の雨が降って  
きたんだ！

でもそれは俺に当たる軌道じゃなくて俺の前方にいる女性に当た  
りそうだったんだ。

そして、危ない？って思った時にはもう体が動いていた。

俺は女性を突き飛ばし、代わりに自分が鉄骨の下敷きになったはず？

でも俺には意識があるし助かったのか？

仮に助かったとしたらここは…

「…病院、なのか？」

いやそんな分けないと思っ直す。

普通に考えて鉄骨に下敷きにされて生きてる訳がない。ほぼ確実にだ。

だがそれだと自分に意識がある説明がつかない。それじゃあ何だ？  
と思っっていると…

「お主はあのまま死んでたよ」

声が聞こえた。

それと同時に、ああ、このパターンはもしかして、とも思った。

声が聞こえた方向に振り返ると、俺の予想を肯定するかのよう  
いかにも神って感じの爺さんと女神って感じの美人がいた。

「あなた、神ってやつか？」

「うむ、因みに名前はゼウスという」

「ふうん、んじゃあその神様がこの場所に俺を連れてきたんだろ

「俺に何のようだ？」

「お主にはな、転生をしてもらおうとおもってな。」

「やっぱりこうなるか。」

「というか死んで、訳のわからないところでいて、神っばいやつに会ったら転生だよな。」

「テンプレだなテンプレ。」

「でも何で俺なんだ？他にも人間なんかいろいろいるだろ？」

「それについてはな、お主はあの時に近くに居たやつを庇って死んだでそやつがたまにいろいろと調査のために下界に行っていた神だったのじゃよ。」

「神じゃったら別に鉄骨に下敷きになる程度じゃ死にやせんものじゃが、そのままじゃとちと不憫に思ってたの、転生させてやるうということになったのじゃよ。」

「ってことは俺はあれか、無・駄・死・にってやつか？」

「うわ〜ないわ〜orz」

「あ、あの…」

「俺が思わずorzになっていると声がかげられる。」

「そちらの方を地に手をついたままに見上げると神と一緒にいた女神っばい人だった。」

「というかよく見てみると何処となく俺が庇った神ってやつに似て

なくもない気が…

「あの、私の不注意のせいであなただを死なせてしまってますいませんでした！」

どうやら本人だったらしい。

「…まあ、しょうがないですよ。起こってしまったことはもうどうしようもないですし気にしないでいいですよ。」

「えと…怒ってないんですか？」

「別に怒ってないですよ。」

それに女性を庇って死ぬなんておれにとってある意味に本望みたいなもんですから。

だからそんな悲しそうな顔しないでください。

あんたは美人なんだから笑ってた方がいいですよ。（ニコ）

そして言葉とともに頭を優しく撫でてやる

「っっ！／／はいつ／／あ、私の名前はアテネっていきます／／」

俺の言ったことに満面の笑みとともに返事を返してくれたアテネ。たださっきと違い顔を赤らめているのはなんでだ？

「…これがニコポ、ナデポ、鈍感、天然というやつか…」

「なんか言っただか？神さん」

「いや、なにも」

神がなんか言ったような気がしたが小さくて聞き取れなかった。  
なんだったんだ？

「さて、では話もついたようじゃしそろそろ本題に入るとするかのお主が転生するのは漫画やアニメの世界となるのじゃがあくまで平行世界じゃ。なにかイレギュラーな事態が起こるやもしれん。そこでこちらからもそれに対抗するための力なんかを授けよう。お主に授けるのは、まあ、仮に名前を付けるとしたら『あらゆる事を極める程度の能力』じゃな。これは主に強化と可能性に満ちた能力でな、思考錯誤する事によってアニメなんかの技も使えるようになったりもできる。あとこの能力により限界がなくなり極め続ける事も可能じゃ。」

わーい、それなんてチート？

ぶっちゃけ強すぎね？もうこれで十分だろ。

…でもどうせだったら俺がもらいたかった物がもらえたらよかったな。

俺だっっていままで生きて来てこういう展開を夢見た事なんていくらでもある。

だから自分の考えた力をもらいたかった。

「んーそうか、なら一つだけお主の考えたものを現実としてやろう。」

「あれ？こころ読まれた？いやそれよりも現実にしてやろうって、マジで！よっしゃー？神テラ太っ腹！」

いやーめっちゃくちゃ嬉しいーです！

とするとどの能力にしようかな〜迷っちゃうけど…よし、アレにしよう。

「俺が望むのは名前を付けるなら

『理想の主人公設定で転生する程度の能力』だ。

まあ、説明すると転生、憑依するに当たって理想の設定を着ける事ができる。

例えば、ど えもんののび くに転生するでしょう。の 太くんがバカなのはみんなの知ってるとおりだろう。

そこでこの能力の出番だ、もし俺がの 太くんが天才だったら？と考えた設定があるでしょう。

そして俺がこの能力をもつての 太くんに転生したら、考えた通りに天才になっているというわけだ。」

はいチートです自重はしません

サーセン。

「あいわかった。それじゃ能力を付加しよう。ぶるああああ？」

とそんな若本的な掛け声とともに俺の中で何かが変わったような気がした。

テテテテーン！

というなんかLvが上がったようなBGMとともに『慶は能力を手に入れた』というのが頭に浮かんだ。

当然スルーである。

「これで能力は与えたぞ。では早速平行世界へ送らあ！ちよっとまって？」…なんじゃ？」

「行く前にあんたからもらった能力でどの程度のできるか試したいのと研究がしたいんだけど、問題ない？」

向こうに送られてからだと試す機会がなかなかなさそうだし、何より見つかったらややこしい事になりそうだから…」

「…それもそうじゃな。そういう事ならわかった。それじゃアテネ、めんどろを見てやってくれ。私は戻る。お主も次の世界、楽しんでくれ。」

「はい！よろこんで！よろしくお願いしますね、慶さん。」

「ああ、よろしく。」

…

…

…

…

… 回想終了！

いや、長い回想だった。

まあ、そんな経緯があつて今の俺があるわけなんですよ。

そしてアテネとても良くめんどろを見てくれた。

ホントに2人には感謝感謝だ。

ただ、アテネがこちらを頬を赤らめてなにも考えてなさそうな目で度々見てくるから、なんなんだ？とは思ったけど。

まあそれはおいといて、研究を終えてコッチに来た時は本当に苦

労したよ。

自我のある俺に対して母乳とかオムツとかマジで恥辱以外の何も  
でもなかったよホントに。

そしてだんだん慣れていく自分が怖かった。

人間の適応能力とは恐ろしいものだ。

まあ、そんなわけで上条当麻に転生してからよつやく15年、や  
つと学園都市デビューを果たしましたわけです。

これから厄介事に巻き込まれる訳だが、

ALL HAPPY END?

これを目標に日野井 慶、改め上条当麻はそげぶしまくる！

さて、まずはトキワに生息するLevel5の電気ネズミをゲッ  
トしにいこうかな？

そんなわけで、じゃあな



## プロローグ2（後書き）

プロローグ2少し遅くなってしまいました。すいません。

今回は書く事が多くてやや適当になってしまったかもしれませんが。

さて、次回は主人公設定かな？と思っております。

次回もよろしく願います。

## 主人公設定（前書き）

一月一日に修正

## 主人公設定

転生前

名前：日野井 慶（ひのい けい）

趣味：漫画、ラノベ、ゲーム、料理、格闘技など

好きなもの：趣味と同じ

嫌いなもの：歪んだ感情を持つやつ、卑怯の度が過ぎるやつ、人として明らかに間違ったことをするやつ

性格：普段はある程度冷静で、時々熱血さが混じってくる感じ。

周りの雰囲気に合わせてられる柔軟さもある。

その時のテンションによっても変わってくる。

能力：『あらゆる事を極める程度の能力』

あらゆる事に対する適性を持つ事ができ、試行錯誤する事によりあらゆる事ができるようになる。

また、あらゆる事を強化でき、強化効率も上がり上限もなくなる。常時発動で、無意識に習得、強化している場合もあり。

『理想の主人公設定で転生する程度の能力』

転生時のみ有効な能力。

簡単に言い換えると転生時にあらゆる設定を付加する能力。または、設定に変化する能力。

能力名は仮です

備考：身長180cm、体重70キロ、服の上からなら触れば明らかにわかるほど筋肉がついている。細マッチョ？

容姿は目が多少切れ長で前髪が若干片目にかかっている。長さは肩にかからないくらい。

イメージとしては、FFの某片翼の天使を柔らかくした感じ。

イケメンでニコポ、ナデポ、天然、鈍感を習得済み。

転生前もこのせいでいろいろあった。

さらに能力によってより拍車が掛かる。

服装は通っていた学校の制服で、制服のブレザーの下にフード付きパーカーを着ていた。

口調がその時の雰囲気や機嫌なんかによって変わる節がある。

真面目な時、ふざける時、普通の時

などの主に三つで変わる

真面目なのは戦闘時や重要な事を話す時やシリアスな場面などに多くで、やや鋭い感じの言葉使いになる

ふざけてるのは親しい奴らなんかと話してる時やネタを挟む時に多く、軽い感じの言葉使いになる

転生後

名前：上条当麻

趣味：同じ、不幸？

好きなもの：同じ

嫌いなもの：同じ

性格：やや上条当麻に引っぱられているところはあるが、基本的には同じ

引っぱられたことにより気だるげな雰囲気少し出てる

能力：『あらゆる事を極める程度の能力』

リアルブレイカー  
『現実殺し』

左手に宿る力

自然に発生する力を消し去る。

例えば、地面に触れて地面の硬度を消し去れば（0にすれば）硬度が無くなる。

だが、対象が大きすぎる場合に有効範囲がある。

主に触った部分から直径2m。

消し去る対象は任意選択。

だが自分に危害が加わりそうな時は例外的に力が発動する。

イマジンブレイカー  
『幻想殺し』の対。

力に段階があり。

イマジンブレイカー  
『幻想殺し』

原作の力とほぼ同じ。

リアルブレイカー  
『現実殺し』の対。

力に段階あり。

備考：身長175cm、体重67キロ

筋肉的には転成前と同じ

容姿は上条当麻を主体に転生前の容姿が混じった感じ。 7：3ぐ

らの比率。

不幸スキルも合わさって、よりフラグが立つようになった。普通の服装は原作の上条当麻と同じ様に学ランだったり、ワイシャツです。

主人公は主に幻想殺しと現実殺しを使います。能力で習得した魔術も使いますがあまり使う事はありません。

ですが明らかに魔術というのをあまり戦闘では使わないのであって、物を創るだとか魔術かどうか判別しづらいものは頻繁に使うかも。

あと、日常生活においても使います。

口調も転生前の様にその時その時で変わってきます。

主人公は能力による適性によって習得によって氣や魔力が使えます。強化の能力によってあり得ないほどのスペックになっています。

でもそれらはリミッターを掛けて抑えています。

リミッターはミサンガみたいなアクセサリーになっていて手首に二つ付けている。

一つの効力はその世界において人間離れしないくらいまで身体能力や魔力、氣を落とす。

もう一つは魔法や、氣の操作などによりできることを制限すること。

それらをつけるのは純粹にその世界を楽しみたいと思ってるためです。

## 主人公設定（後書き）

次回から一話に入ります。

主人公が使える魔術については使い始めたらまた説明しようと思います。

## 高校入学。だから俺は寝る

ここは学園都市。

総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人。そしてその8割は学生によって構成されている。

そしてこの学園都市において学生たちが行っているのは、能力開発である。

学園都市というからには、やはり学校の数の凄まじいものであり、上位の学校から下位の学校まで腐るほど建っている。

ここで話は変わるが今の季節は春、しかも桜も咲いている4月の前半である。

学年が上がるものもいれば卒業して、新しい学校で勉強するものなど様々な者がいるだろう。

そして今日は春休み明けの日である。街中には新しい制服を着て、これからの学校生活に期待を持つ者、緊張してやや硬くなってる者、不安を持つ者と、進学したであろう者の表情からはそんな感情が読み取れる。

つまり今日はどこの学校でも入学式が行われるのだ。

そしてここはその学園都市の学校の内の一つ。別に名門校というわけではなくどちらかといえばその逆に位置する高校だ。

そしてここにはある一人の学生が通っている。いや、正確にはこれから通い始めるのだが…。

その学生の名前は上条当麻。そう、我らが主人公である。



もちろん当麻が通っている学校でも当然のこと入学式が行なわれている。

今も新入生たちが体育館に集まり入学式を行っている最中であり、それを証明するかのようこの学校の校長であろう禿げた人物が長々と挨拶をしている。

その長つたらしい挨拶に飽きてきたのか、体をかくんと揺らしながらも寝ずまいと必死に目を必死に開いている生徒もいる。

そんな中、当麻はというと…

「……………ZZZ……………」

…下を向いて思いっきり寝ているのであった。

side：当麻

いやーよく寝た。清々しいくらいの快眠だった。夜に普通に寝るよりもよく眠れたのでは？と思えるほど気持ちよ〜く夢の世界に旅立てた。

というのもあの校長の声が、中年太りのハゲ親父に似合わないかわいらしい感じ眠気をさそう声だったのが原因だな。いい感じに子守唄になっていた。

俺だって最初のうちは真面目にやろうと思ってたんだ。

…ホントダヨ？

でも聞き始めて30秒もしない内に眠気が来て、50秒もするともうどうでも良くなっていて、1分もすると睡魔という強敵に意識があっさり落とされていた。

だから仕様がなかったんだと言い訳させてくれ。

まあ睡魔の話はここで終わりにするとしよう。

さて、俺が眠っている間に入学式も終わり今は各クラスでホールルームの時間となっている。

だが俺たちの担任になるであろう人物が入ってきた時俺より前の席にいる青い髪のやつが「うほー！」だとかうるさいのなんの。

因みに担任の名前は月読 小萌だった。

あの合法ロリのお方です。  
平行世界と言ってもここは変わりが無いらしい。

それから、自己紹介をしてある程度説明を受けたあと解散となった。

俺も帰ろうかな？と思った時に俺のところにある2人が話しかけて来た。

「なあなあ、君入学式で思いつきり居眠りしとったやる？」

「そうそう、普通は最初くらい自重するもんじゃないかやー？」

そう言っただけで話しかけて来たのは青髪にピアスを付けた担任の登場に騒いでた男と、金髪にサングラスとアロハシャツを装備している男、

そう、変態の青髪ピアスとシスコンの土御門 元春だった。

あ、自己紹介したのに青髪ピアスの本名聞き忘れた。でももういいか。

「…自重しろってゆーならお前らのその髪とピアスとグラサンとアロハシャツはなんなんだよ。それこそ自重しろよ。」

「あー、それを言われたら…」

「返す言葉もないにやー。」

「まあそんなことはいいや。こうやって話すのも何かの縁だ。ホームルームでもやったけど改めて自己紹介するよ。」

俺は上条当麻。呼び方は好きにしてくれ。」

「それじゃあ上やんって呼ぶ事にするわ。ボクの事は青髪ピアスって呼んでな。」

「土御門 元春。こっちも上やんって呼ぶことにするにゃー。」

「ああ、よろしく。」

「そつや、これからその辺一緒に回らへん？親睦の意味も込めて…」

「こっちは別に暇だからいいぜい。」

「俺も暇だからいいぞ。んじゃ早速いきますか。」

そうして一緒に教室を出てそのまま校外も出て行く。

回ってる途中、青髪が幼女を相手に喜々として話かけようとしていた。そしてそれに便乗する土御門のバカ2人を挟りこむように放った右で沈めて止めた。

路上で高校生が2人も沈められるのはやたらと目についたらしく、2人の足を持ってその場から引きずって早々に立ち去った。

ガリガリジョリジョリいつていたが気にしない。

2人を引きずったあとに、金と青の糸のようなものが大量に散らばっていたがそれでも気にしない。

その後目覚めた2人と共にまたその辺を回ってある程度いい時間帯になったので解散した。

学校初日はなかなか有意義だったと思う。

## 高校入学。だから俺は寝る（後書き）

やっと一話目を投稿できました。

遅くなってすいません。

次回は2話です。

主人公設定を少し弄りました。

あと、気がついていらっしやるとは思いますが補足説明としまして  
プロローグで「あいつ」という表現が多々ありますが、「あいつ」  
というのは神（ゼウス）のことです。  
念のため説明させていただきます。

俺は説教される側じゃない！（前書き）

1月1日に修正しました。

俺は説教される側じゃない！

入学式が行われた次の日。

新しく一年生になるにあたっての最初の大きなイベントを終えた事により、新入生たちは多少の緊張が抜けたことだろう。

今日学校で行われたのは、委員会やクラス係り決め、身体測定などである。

だが今はそれも終わって一段落し、昼休みの時間となっていた。

教室内では前の学校からの知り合いどうしだったり、はたまた新しく知り合った者たちどうしだったり、それぞれが思い思いに会話している。

そしてそれは当麻に至っても例外ではない。

昨日の入学式後に知り合った青髪ピアスと土御門 元春と共にオタク談義に花を咲かせていた。

そんな特殊な会話をしている三人の元に、一人の女子生徒が割り込んで来た。

side:当麻

「…というわけでボクが思うに女の子で一番魅力的なのは小萌先生みたいなロリ系であるということ…！」



「あまいぜ青髪！魅力的という事ならメイドの妹！さらにそれが義妹だったらというのが一番ぜよ！」

「お前ら性癖が特殊すぎるだろ！やっぱり日本人なら長い黒髪がだなあ…！」

どうも、上条 当麻だ。

悪いが今の俺はとても忙しい。なぜならこの重傷末期患者2人に黒髪の女性の良さを伝えなければならぬからだ。

え？お前も十分きてるって？

？ なんのこっちゃ？

は？ 今度は何？少しは自重しろって？

…お前、ここにいる俺たちの3人にそんなもん求めてどうすんだ？俺たちは自重なんて鎖からとつくの昔に開放された自由人ニートなんだよ。

俺は今この会話に存在価値を見出しているんだ。時間取らせんな！

「なんや2人とも？別にボクは2人の趣味を否定する気はないんやけど、ロリ一番説を否定するのはいただけへんな…」

「そつちこそ、義妹メイドの良さが一番ていうのを理解できないとは、ヤル気なのかにや〜？」

「はっ！いいぜ、お前たちが異常しか認めねーっつーなら、まずはその現実をぶち殺す？」

「ちょっと？そこのバカ3人？」

俺たちが己の主張の正しさを証明するための 聖戦（茶番）を始めようと構えるが、怒鳴り声によって横やりを入れられて萎えてしまった。

俺たちは声の主の方へと向く。

そこには長い黒髪で整った顔立ちをしていてからだの前で腕を組んだポーズで立っている女生徒が居た。

その女生徒俺も思ったことだが、多分隣の2人も思ったことだろう。

「…なあ2人とも、どんな女の子が一番魅力的かって話題だったけど、俺やっぱり変えてもいいか？」

「奇遇だな上やん、義妹メイドも最高だが、この時ばかりは変えなくなってきたところだぜい。」

「なんやツッチーもか？実はボクもそう思ってたところや。」

「…やっぱり女の子が一番魅力を感じるって言ったら…」

「巨乳だな!」「巨乳やな!」「巨乳だにゃー!」

「貴様らしい加減にしろ?」

「「「ぐはっ!!?」「」」

直後凄まじい威力のゲンコツをもらった。

∴ ∴ ∴ ∴ ∴

「∴あの、まずあなたはどちら様でしょうか?」

あ、ありのままに今起こった事を話すぜ。

この女生徒にパンチをもらったと思ったら3人揃って正座させられていた。

な∴∴なにを言ってるのかわからねーと思うが俺もなにをされたのかよくわからねー∴∴。

レポート瞬間移動だとか時間操作とかじゃない∴∴

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「貴様は自分のクラスのやつのもわかんないの？あたしは吹寄。  
吹寄 制理よ。」

はい、皆さんなんとなく感じていたとは思いますが、吹寄さんです。

別に俺、分からなかった訳じゃないです。会話を交わすのは初めてだったから一応名前を聞いた方がいいかな〜と思っただけです。

吹寄は原作でもあんまり登場してなかったから俺もあんまり性格を把握しきれてないところがあった。

実際に会ってみて思った事はだ、さつきもいったかもしれないが吹寄はホントにスタイルがいい。このクラスの女子たちと比べてもその差は歴然だ。

スタイルも良くて顔もいい。なのになんで吹寄から色気が1ミリも感じ取れないんだろうか？

美人に罵倒されるのが好きそうな青髪ですらなにも感じてなさそうだ。全く持って不思議である。

でも今そんなことはどうでもいいか。

問題はどうしてこんなことになってるかだ。

「では吹寄さんや、なんで俺たちはこんな状況になってるんでしょうか？」

俺の言葉を肯定するようにで同じように正座している2人も「うんうん」と言いながら頷いてくれる。

「そんなのは貴様らが大声であんな変態トークしてるからに決まってるじゃない。」

「変態とは何や！ボクらは1人の紳士として」「ああん？」「ヒイイ？すみません？」

物凄い迫力だったな。

直接睨まれた訳でもないのに脚がガクブルしてるぜ。正座してるけどね。

土御門も俺と同じ様な事になってた。

「だいたいなんなの？その青い髪にピアスだったり金髪、サンダラス、アロハシャツの三点セットは。あと上条当麻、貴様は入学式の時寝てたわよね？少しは場をわきまえという事をぶつぶつぶつぶ……………」

殴られたと思ったらなんで今度は説教されてんだ？  
というか普通そのポジションは俺のものだろうが…

「…なあ上やん、この状況どうにかしてくれニャー…」（ヒソヒソ）

「はあ？何で俺なんだよ…」（ヒソヒソ）

「そりゃあ上やん、自分黒髪ロングが好みって言ってたからやないか…」（ヒソヒソ）

「そつだにゃ〜。それに今なら巨乳属性に風紀種も付いてきてお得だぜい…」（ヒソヒソ）

「別に俺はお前らと違ってそこまで執着してねーよ。さらにいまこの時にはかりは風紀種なんて欲しいとは思わねーよ。仮に上条さんの好みだったとしても、説教くさかったり手が出てくる女性はちょっと苦手何ですけど…(ヒソヒソ)」

「ぶつぶつぶつぶつぶ…ってさっきから貴様らはさっきから何コソコソしてる？」

「い、いえ！何もありませんよ？」

「そ、そうにや〜！何にもないにや〜？」

「そ、そうですよ！別にあなたが少し説教臭いだなんて言ってまあっ…」

「なっ？」

「ちょ？」

「……………へえ〜…そう…」

失言した。

吹寄から口から声が聞こえた時には俺の体は教室のドアに向かってもう動き出していた。

人はものすごく熱い物を触った時、身を守るため先に手が引っ込みそれから熱かったと感じるものだ。

そのような現象を総じて反射というのだが、俺の体はまさにその反射によって行動していた。

頭の中にけたたましいほどの警報音が鳴り響いたのは、廊下に出

た後だった。

2人も少し遅れながらも俺の後に続いて走り出した。

「逃がすか——！」

「上やん！なんてことしてくれんねん？」

「上やんのあほ——？」

ああ、なんていうかもうこれはあれを言うしかないよな……  
学園都市に入ってから一度も言っていなかったけど、どうやら上条  
当麻という人間はこの言葉と共に一生を過ごさらしい……

大変長らくお待たせしました。

それでは皆さん、ご唱和ください！

せーの

「不幸だ————————————？？」

∴ ∴ ∴ ∴ ∴

その後、俺たちと吹寄の追いかけっこは昼休み明けのチャイムが鳴るまで続けられた。

結果を言えば俺たちは何とか生き残る事ができた。

ある程度まで抑えあるが、能力で強化されていた俺をギリギリまで追い詰めるなんて恐ろしいやつだ。

あれか？怒りのせいで我を忘れて人間の限界でも超えたか？

でもまあ、何はともあれこれで明日の太陽を見る事ができる。

## 閑話休題

その後は放課後まで何もなく終わった。

今日は用事があり青髪や土御門たちと一緒に帰らず解散することに。

用事というのはまあ、買い出しだ。

この学校の近くのスーパーで夕市があるらしい。俺はそこで半額の卵を手に入れなければならない。

貧乏学生である俺にとってはどうしても見逃せない。

そうして急いで靴を履き替え学校を出た俺は早足のままスーパーへと向かう。

だがその途中なにやら大声で言い争いをしているだろうことがわ



かるものが聞こえた。

なるべく早くスーパーに向かいたかったのではあるが、どうにも気になって仕方がない。

携帯を使って時間を確認してみて

、まだ少し余裕があることが分かる。

そう考えると言い争いが聞こえた方へと向き直りやや駆け足で行く。

現場と思わしき場所に着くとそこにあっただのは、髪を金に染めたり耳にピアスつけたものだったり、誰が見ても不良と答えるであろう男たちが5人。

そしてそのうちの1人によって羽交い締めになれ襲われかけている女生徒が1人という光景だった。

こんなものを見ちまったらもうスーパーがどーのこーのなんて言ってもらえない。

俺はその集団に向かって歩いて行った。

俺は説教される側じゃない！（後書き）

次回に続きの話をします。

まだしばらくインなんかさんは来ません。

あと主人公設定で説明不足が結構あると思いました。  
近いうちに変えようと思います。

あと、セリフで その現実をブチ殺す というのがありますが、  
手に現実殺しを持っているため間違いという訳ではありません。

むしろこっちで行こうかな？とも思っております。または合わせる  
かもしれません。

## 鉄の女でも結局は女の子（前書き）

新年あけましておめでとございます

元旦に投稿出来ませんでしたので、いま挨拶させていただきます。

## 鉄の女でも結局は女の子

s i d e 当麻

「お前ら、5人でよってたかって女の子1人に何してる。」

俺はその集団に聞こえるだろうところまで近づき言った。

こいつらは自分たちの事に忙しかつたのだろう、俺が近づいているのに気づかないで声をかけた時ようやく気づいた。

不良達は部外者であるおれに対して「何だこいつ?」って感じの疑問顔になっている。

だが生徒の方からは驚愕って感じのものが読み取れる……つてこいつ、遠目からじゃ不良たちと重なっててよく見えなかったが…

「あ、あんた…上条当麻!」

「吹寄?(なんであの吹寄が?)」

そう、吹寄だった。

ていうか吹寄ならこいつらに一発入れて逃げるくらいできそうだと、昼休みの吹寄の印象が強いのでそう思ってしまう。

…つてかよく不良の方を見たら顔にもらったのを象徴するように頬が赤く若干腫れているやつが居た。

「お前何?部外者はあっち行けよ。」

「女を助けてヒーロー気取りですか？」

「それとも、あれか：俺たちにボコボコにされたいマゾなのかな？」

そんなことを言った後、不良たちは「へへへっ」と薄気味悪い笑いをする。

「別にマゾでもヒーローのつもないが？それに部外者だろうがこんなの見て見過ごせるわけないだろ。」

「な？あんたこの人数相手にやりあおうってゆーの？無理よ？」

「そうそう、この嬢ちゃんの言うとおりだぜ。」

「俺たちは今お楽しみ中なんだよ。ボコボコにされたくなかったらさっさと帰んな。」

「だからさつきも言っただろ？見過ごせるわないつて…まあ確かに、この人数差だと無謀な様に見えなくもないけどな、ボコボコにされるのが俺とは限らねーぞっ！」

語尾を強めて力を込めると共に踏み込む。

不良達は吹寄を中心に囲む様に立っていたが、俺はまず一番近くに居たやつまでの距離を一気に詰める。

そしてその勢いままに頬を殴る。殴られた不良は不良達の間を吹っ飛び3mくらい転がって停止した。

ぴくりとも動かなことから気絶したのだろう。

他の奴らには俺がダッシュする姿勢が見えたと思ったらもう殴るところだったという風に見えてたと思う。そのぐらいの踏み込

みをしたからな。というより今のは縮地の技術に近いな。

そしてそれを証明するかのように周りの奴らは「は？」と驚きを露わにしている。

驚愕して固まってる間に殴った不良の右側にいたやつに、殴った勢いを利用して、右脚を軸に左の回し蹴りを脇腹に決める。

殴られた不良同様、そいつも勢い良く吹っ飛び少し転がった後に停止した。気絶はしておらず、寝転がったまま呻いている。

そして今度は左側に居たやつに掴みかかり、柔道の背負い投げをで地面に叩きつける。

不良は「がはっ？」と息を吐いて悶絶している。

柔道や合気道の達人が技を決めると、やられた方は何をされたかわからないうちに転ばされているという。

俺は転生前、色々な格闘技について調べたりそれを試したりするのが好きだった。いわゆるバトルマニアなのか？

そしてもらった能力なんかでより技術を強化してその領域にたどり着くことができた。というよりさらにその先までいつている。オリジナルの技術も開発してる。

つまりこの不良は俺が向かって来たと思ったたらいきなり視界が回って地面に叩きつけられていたと感じてるはずだ。

3人を倒した俺は吹寄を羽交い締めにしていない、吹寄に手を出そうとしていた不良を見る。

だが流石に驚きからの硬直が解けたのか、こちらに殴りかかってきた。

俺はその拳を側面叩いて逸らす。不良は前のめりにバランスが崩れ、その体の胴に向かってアッパー気味に殴る。

カウンターとなったそれを食らった不良は腹を抑え、崩れ落ちる様に倒れる。

残り1人となった不良の方へと向き直る。

だがそこでその不良は…

「う、動くんじゃないっ？こいつがどうなってもいいのか？」

「「っ？」「」

…ポケットからナイフを取り出し吹寄の顔に突きつけやがった。

襲おうとした拳句に自分がやられそうになったら人質にする？

…  
…  
…  
…  
…

フザケンナヨ…？

s i d e o u t

s i d e 吹寄

昼休みの時の3人組を思い出す。入学したばかりだったから見過ごしそうかとはおもっていたけど、教室であんな会話を大声でさ

れていると気になってしまふのは仕方がないと思うわ。

そのバカな会話をしている3人もやっぱりバカなやつらだったわ。

あたしはその3人の中でツンツン髪のやつが特に気に入らなかつた。

それはそいつから発せられていた気だるげな感じが、何かにつけて手を抜いてそんな雰囲気の原因ね。

突然だけど話を放課後に変えるわ。

帰りのホームルームが終わった直後、あたしは帰りの支度を手早く済ませて、早々に帰った。

何か用事があるということでもなかったけど、強いていうなら…気分ね。

それに今考えて見ると…入学したてのあたしにとって、まだクラスに親しい友達なんていなかったから残っててもあまり話すことも無かつたしね…

そうして帰路に立ったのだけどその途中でナンパにあった。

ナンパしてきたやつらはいかにも不良って感じだったから相手にしないでそのまま無視した。

しかし相手もしつこく言い寄ってきた。でもあたしは無視し続けたわ。

それに不良達は腹が立ったのか「おい！」っていう怒声と共に強引に手を引っ張られた。

もちろんあたしも抵抗したわ。不良の1人を殴るといふ形で…でもそれに不良達が完全に切れ、あたしが殴ったやつとは別



の不良に取り押さえられてしまった。

「離しなさいよ？」

「そう言われてはい、わかりましたって離すわけねーだろ。」

「それにしても、とんだ暴力女だ！そんなお前には調教が必要だな  
！」

不良達がそう言っつてニヤニヤ笑い出すといやらしい手つきで、  
あたしの胸に手を伸ばしてきた。

悔しかった。あたしにできる抵抗といえはこいつらを罵倒す  
るぐらい…本当に悔しかった。

「お前ら、5人でよつてたかって女の子1人に何してる。」

そんな時、声が聞こえた。

きつとこの状況を見兼ねて助けようとしてくれたんだと思っ  
けど…でもその声はすごく最近聞いたことある声だったわ…  
そして確認して驚いた。

「あ、あんた…上条当麻！」

「吹寄？」

その声の主は、あのバカ3人組の1人の上条当麻だったわ。  
上条は「なんで吹寄が？」って疑問が読み取れるわね…。  
あたしだってなんであんたがこんな所に…って思ったわ。

ただ、気になる事があるのだけど…

「（こいつ、ホントにあの時と同一人物？）」

今のこいつからは昼休みのような気だるさや、ちょっとふざけてる雰囲気や欠片も感じられない…むしろその真逆の真面目で冷静な印象しか伝わってこない。

同一人物か疑うのも無理ないと思うわ…

そんな事を考えてる間に不良達と上条とでやり取りがあったらしく、あいつは…

「別にマゾでもヒーローのつもないが？それに部外者だろうがこんな見て見過ごせるわけないだろ。」

…って言った。

さっきの割り込んだ時の言葉からもあたしを助けようとしてくれるみたいだけど、あたしを抑えてる奴を抜きにしてもまだ一対四…それを目の当たりしてもまだ助けようとしていることに、流石に驚いたわ。

最も、上条がこの人数差をものもしない能力があるとするなら話は別だけど、あんな普通の学校に通ってる時点でそんなものがあるとは思えなかった。

だからあたしは驚いたって感じの言葉と共に言ったわ、「無理よ」って…。

それを肯定する様に不良達も何か言うけど、それでもあい

つは顔色一つ変えたり、考えるそぶりも無い。

「（なんでそんなに自信たっぷりなの？こいつは…）」

でもその疑問は次のあいつの行動で解けたわ…

「だからさつきも言っただろ？見過ごせるわないって…まあ確かに、この人数差だと無謀な様に見えなくもないけどな、ボコボコにされるのが俺とは限らねーぞっ！」

…そう言っつて踏み込む姿勢を取ったと思ったら、いつの間にか近づいていて1人の不良を殴った後だった。

「「「「「は？」「」「」「」」

あたしを含めて不良達からもそんな事が漏れた…

でも上条はあたし達が惚けてる間も止まらずに次々と不良を倒していき、あっという間に不良はあたしを取り押さえてるだけになった。

「……………凄い……」

「なっ、なんなんだこいつ？」

上条が次々と倒していく様子に、あたしは自然とつぶやいていたわ…

でも1人になった奴はそうも言っつてられないみたいね…まあそうよね。だって次は自分の番なんだから。

でも、次の展開はあたしには予想外だった…

「う、動くんじゃないっ？こいつがどうなってもいいのか？」

「っ？」

「っ？（ナ、ナイフ？）」

不良はやけになったのかナイフをあたしに突き付けてきた。

これにはあたしも流石に怖かったわ。

だってただのナンパが自分の命の危機になったのだから…当然よね…

もしかしたら死んでしまうかも…そんな悲しい気持ちになっていたら突然その場の気温が下がった気がした。

「（か…かみ…じょう？）」

その原因はすぐにわかった。目の前にいる上条がもの凄い怒気と共に憤怒の形相でこちらを、正確にはあたしの後ろの不良を睨んでいたからだ。

「デメエ、ふざけんじゃねーぞ？？？？」

「っ？」「っ？」「っ？」

上条が突然、空気がビリビリとする程の怒鳴り声を挙げた。それに対し不良はビクツとなつて短い悲鳴を挙げた。それも仕方ない事だと思うわ。あたしも声が出そうになつたから…

不良が怯んで硬直したのを上条は見逃さなかつた。一気に近づいて不良のナイフを持つてるほうの腕を掴む。

その腕を引つ張りあたしと不良引き離すとその腕を掴んだまま柔道の一本背負いで不良を地面に叩きつけた。

「ガアツ？」と声を挙げた不良の上に馬乗りになる。痛みからか、不良はその時にはナイフから手を離していみたい。

「なんであんな事なつてたのは何となく分かる！大方ナンパに失敗だからその腹いせ何だろ？だがな、そこで助けに入った俺にやられそうになつたからって自分の都合で人質とつていいわけねーだろーが？しかもナイフまで持ち出して！お前達は吹寄に相手にされなかつた時点で諦めなきゃいけないかつたんだよ？でもな、お前みたい腐った奴には言葉だけじゃわかんねーだろうからな、痛い目にあつてもらおう！歯ア食いしばれ？」

上条はそう言つて不良の顔面に拳を叩き込んだ。

不良は鼻から血を流して動かなくなつた…気絶したみたいね。

「（………終わつ…た…）」

あたしは終わったことで緊張から解け、地面にへたり込んでしまう。今回ばかりはホントに怖かつたもの…

上条は気絶した不良から離れてあたしの方にやって来た。目の前まで止まってあたしに手を差し出して…

「もう大丈夫だ。怪我は無いか？立てるか？」

怒った時の憤怒の表情と違い、優しげな声で微笑みながら掛けられた言葉に、

本当に安心できた。

side out

side 当麻

その後、あの吹寄が突然泣目になったから相当焦った。完全にオロオロしてたと思う。

とりあえず抱き寄せて、もう大丈夫だからと言葉を掛けながら頭を撫でてやった。

そしたら嗚咽を漏らしながら泣き始めたから、余計に悪化させちゃった？と思い離れようとしたんだけど吹寄が両手で俺の制服の胸の所を掴んで離さなかった。

「(え？え？この人本当にあの吹寄さん？別人じゃないよね？)」

考えてみたら、いきなりナイフ突き付けられて殺されそうになったんだからな、いくら吹寄でも女の子だし、相当怖かったんだろ？だからそのままにしてやった。

それから数分して離されたから、とりあえず場所を移そうと思<sup>ジャッジメント</sup>い電話で風紀委員に通報と事情を説明してそこを離れた。

今考えたら路上で女の人を抱き寄せるとか、変態じゃね？  
周りに人がいなくてホント良かった…

近くにあった公園にやって来た。吹寄はベンチに座らせて俺は自動販売機に飲み物を買いに来た。

吹寄の好みがちよっとわかんなかったから、とりあえずお茶を自分の分も含め2つ買ってベンチに戻った。

「吹寄、お前の好みがちよっとわかんなかったからお茶にしたんだけど、これで大丈夫か？」

「だ、大丈夫、問題ないわ。ありがとう。」

そう返事をもらって安心した俺は、吹寄の隣に座る。  
お茶の缶の金具を引っ張り、缶を開けて一口飲む。缶を口から離して、「ふう」と息を吐く。

吹寄もお茶を飲んで一息した所で話しかける。

「落ち着いたか？」

「え、ええ、恥ずかしい所を見せたな上条。」

「どうやら、もう大丈夫そうだな、目元がまだ若干赤いが…て  
いなか顔全体がなんだか赤いような…」

「恥ずかしいって言ってたしその通りなんだろうな…」

「あれは普通の反応だよ。別に恥ずかしいことなんかじゃない。」

「そう言われるとこっちも少し楽だね。ありがとう。」

「…」

「…何かした？」

「あ、いやその、吹寄がありがとうなんていうのが以外で…」

「…知り合ったばかりとは言え、貴様がどういう目であたしを見てるかよくわかったわ。」

「へ？あ、いやいや！」「これは言葉のあやでして、その、えっと…ごめんなさい？」

「…ま、まあいいわ、今回は助けてもらったんだし特別に大目に見るわ。」

「へ？あ、ありがとうございます。」

そこで一旦会話が途切れた。やっぱりあんな事があつた後だと話しづらいし、会話もそこまで続きそうもない。

あと、やっぱり吹寄に違和感がある。さっきから何となく話す時なんかどもってるし、今の所だつて前なら殴られる所だと思うし…でもやっぱり気のせいなのかもな…

「そういうえば吹寄、今回の発端を聞いてなかったんだが、やっぱりナンパだったのか？」

「…ええ、その通りよ。あいつらがナンパして来てそれを無視してたら強引な手段になって…反撃に1発殴ってやったら襲われそうに



なつたのよ…。」

「そうか、やっぱりナンパだったか、まあ吹寄は顔も整ってて可愛いしな、それにスタイルもいいしナンパされない方が可らしいよな…。」

「っ？か、かわっ／／／き、貴様はいきなり何を言い出すのよ？／／／」

「え？何がだ？俺は本当にこいつの事を言っただけだぞ？」

「つつっ！！！？／／／／／（なんでこいつはこういう齒の浮く様な事がいえるの？）」

「ど、どうした？なんか急に赤くなった様な…まさか熱か？すまん吹寄、ちよつと熱測るぞ？」

そう吹寄に伝えて近づく。吹寄の顔に手を添えてデコとデコをくっ付ける。

なんか吹寄が「な、なななな／／／」とか言ってる気がする。それと共にどんどん温度が上がってるような気もするんだけど…

「／／／ななななななにをするんだ貴様はーっ？／／／／／／／」

「しぶっ？」

な、なんで上条さんはいきなりポディーブローを喰らわねばならんのですか？俺はただ良かれと思ってやっただけなのになんでこんな仕打ち？

「ハア：ハア：ハア：ハア：／／／／／／」

「な、何するんですかいきなり？上条さんが何したっていうんですかっ！」

「う、うるさい上条当麻！／／／そんな事はなんでもいいだろう？／／男がいちいち気にするな？／／」

「いやいや！男でも気になる事は気になるんですよ？」

「と、とにかく！／／今日はありがとう、助かったわ。あたしはこれで帰るわ。また明日会いませう。あ！ちよつと待った！」今度はなんだ！」

「帰りは一人で大丈夫なのか？」

「はあ？流石に一日に二回、もナンパになんか会わないわよ。」

「そうかもしれないけど単純に心配だからだよ。あと今回みたいに何か困ったことがあったら言えよ？これもなにかの縁かもしれないし、お前のために時間も作るよからな。」

「っ？／／／ええい貴様というやつは次から次へとなんなのよ！！／／／もういいまた明日な！／／」

そう言っただけで吹寄はダッシュで帰ってしまった。何をそんなに急いでるんだ？

でもまあ、吹寄も帰ってしまった事だし俺も帰るか。

あ、スーパーのこと忘れてた。

## 鉄の女でも結局は女の子（後書き）

投稿一日空いてしまって申し訳ありません。

今回の2話は吹寄と絡みなのですが、吹寄の口調が資料が少なくてわからなかったのが原因で遅くなりました。

思いつきり原作捏造です。

そして、一つ前の話しも修正しなければならなかったのでより時間がかかってしまいました。

しかもこれでもまだ妥協点ですのでこれから先、修正する可能性大です。

修正といえば主人公設定を大きく修正しました。目を通していただけたらと思います。

次回も本編更新します

イメージ的には少し時間を飛ばしてビリビリとの会合をやるのかな？なんて思っております。

## ゴールデンウィーク、時々フラグ（前書き）

御坂とのエンカウントの予定でしたが急遽変更しました。そして…

Y? A? T? T? I? M? A? T? T? A

それだけ言っておきます

## ゴールデンウィーク、時々フラグ

入学式から早いもので1ヶ月。

桜の面影などもう残っておらずもう緑しか存在しない。

今日は5月の始め、しかもゴールデンウィークである。

世間的にはすべての学校が休みであり、学園都市でも例外はあるだろうが基本的には休みとなっている。

ゴールデンウィークを利用して、固まってきたグループで何処かに出かけるなど、家でゴロゴロ過ごすなど、学生達は大概その様にして過ごしている筈だ。

ここは第7学区のとあるアパート、その一室に住んでいる者がいる。

そう…上条当麻だ。

当麻はこのゴールデンウィークを家で過ごすため布団に包まり、コンクリートの塀に張り付くカタツムリの様にベッドに張り付いていた。

そんな時、一本の電話がかかって来た…

side当麻

巫女巫女　ース！巫女巫女ナー　！生麦生米巫女　　ナース！…

「…なんだ？人が折角気持ち良く寝てる時に…それにこの着信音は青髪か？」

「ゴールデンウィークを迎えた今日この頃、俺は自宅で惰眠を貪るためにベッドに寝ていた。」

吹寄のナンパ騒動から早いもので一ヶ月が経った。あの時から俺と吹寄の仲はそれなりに良くなった。

朝に挨拶したり、たまに昼飯を一緒に食べたり、稀に一緒に帰ったり、その様なことをする様になっていた。

でも、吹寄がその時顔を赤らめていたのは何だったのだろうか？風か？

そして、そんな俺たちを見て青髪と土御門がうるさいのなんの…俺たちをからかって怒った吹寄に沈められていた。怒っていたからなんだろうな…顔が真っ赤だった

因みにからかった後の会話を再現すると…

「カミヤん、吹寄とは何があつたんや？」

「そうだぜい、あれだけ嫌われてたのに、いきなりフラグが立つてるなんておかしいにや〜！その辺キリキリ吐いてもらうぜい！」

「いや別に何も無いって。あ、でも昨日ナンパされてる所を助けてやったな…でもそれだけだ。それに吹寄に限ってフラグが立つわけないだろ？」

「な？あれだけ分かりやすいのに気づかないやんて…どうなってるんや？」

「あり得ないぜい…これからはコレをカミヤン病と命名しよう。  
そしてカミヤン…」

「「恐ろしい子？」」

てな感じの会話があったんだがその時の内容は今でもあまり理解  
出来ていない。全くもって意味が分からん。

まあ過去の話はここまでにしておいて、そろそろ電話に出るとし  
よう。

ピッ

「もしも〜し、なんだ青髪？」

『あ、カミヤン？今な、外を適当にぶらぶらしとったらツッチーと  
会ってな、そのまま邪魔することになったんよ。だからカミヤン  
も来いへん？所でカミヤン今どこ居る？』

「…俺は今は家でゴロゴロしてて忙しい。」

『なら暇なんやな？それじゃ行きよるから、準備しとってな？ほな  
またあとで。』

「おい、聞いてたか？俺は今忙しいと『プツッ、プーツ、プーツ、  
プーツ、プーツ…』………」

あの野郎…勝手に切りやがって…

でも、忙しいとか言いつつもぶっちゃけ暇だ…



…行ってみるか  
そう思い準備を始める。

「（まあ、土御門の家は隣だし、ゆっくり準備しても間に合うだろう。）」

ていう最初、土御門が隣だったことに驚いちゃった。原作知識はあった筈なのに…どうやら細かいことは忘れちゃってるらしいな…

そしてある程度の準備を済ませたら、外から話し声が聞こえて来た。どうやら二人が来たようだ。

玄関から顔を出し確認するとやっぱり青髪と土御門だった。

「よう2人とも。」

「カミちゃん、今呼ぼうと思った所やで。」

「でも、手間が省けて良かったんじゃないか…。まあ2人とも、今鍵開けるからちょっと待ってくれにやー。」

土御門はそう言って鍵を開けようとするが、なんか疑問顔になっている…

「どうしたんだ土御門？」

「ん？ああ、なんか鍵が開いてる…」

「は？ま、まさか泥棒かいな…？」

「アンチスキル  
警備員に連絡するか？」

「いや、多分あいつだから大丈夫だぜい。」

あいつ？と思うが土御門は中に入って言ってしまっ。

それに続くように俺も入って行くと、中には少女がいた

カチューシャにメイド服を着た少女だった。

その少女は土御門を見てこう言った。

「アニキ、何処行ってたんだー？」

…

…

…

…

「義妹ていむせの土御門舞夏たぞー。いつもアニキがお世話になってる。アニキと被るんで舞夏って呼んでくれて構わないぞー。」

「土御門をお世話してます、この部屋の隣人でもある上条当麻だ。よろしくな。」

「同じく、ツッチーと同じクラスやで。ボクのことには青髪ピアスって呼んでくれや。」

「わかったー。」

「ちよ！2人とも何をいつてるんだぜい！お世話された覚えなんか無いにゃー！あと、舞夏も納得するな！」

「所で舞夏がメイド服を着てるのはコスプレなのか？」「おい、カミヤんスルーなのかにゃー？」

「まさか、ツツチーの強制やるか…」「青髪までもにゃー？」

「違うぞー、私は繚乱家政女学校に通う真正銘のメイドさんなんだー。しかもエリートなんだぞー。」「にゃー、俺の愛しの義妹まで…」

俺たちが土御門をスルーしているとorz状態になってしまった。舞夏にスルーされたのが相当効いたのか、ズーンっという効果音と共に縦線があるのが見える。

義妹に無視されてここまで落ち込むとか、まったくもってうっとおしい…

「ていうか…ツツチーがメイドで義妹やったら良いとかいつだか言うてたけど、あれ妄言やと思っとなわ。」

「そうだよな、しかもこんなに可愛いときたもんだ。土御門の義妹にはもったいないな。」

「……アニキ、私って可愛いのかー？」

「ああ舞夏、お前は可愛いぜい。青髪、元が居ないであんな事言っただら痛い奴じゃ収まり切らないにゃー。そしてカミヤん！貴様人家の義妹になにフラグ立てようとしてる？ああん？」

ええーなんでこいつ、こんなに切れてんの？

あと俺に立つの不幸フラグだけだと思っただが……あ、やべえ

目から汗が垂れる。

「なに急に怒ってんだ？俺はただ思ったことを言ったただけだぞ？」

「……………ぽっ」

「だーかーらー！そんなこと言うからフラグが立っつて言ってるんだにゃー？あと舞夏！頬を赤らめるんじゃないぜい？」

「こ、これがカミヤん病の感染力とその威力……………恐ろしい……………恐ろしいでカミヤん……………」

全く持つて意味が分からん……………そんなお前には「日本語でok」と言っつてやりたいが、もっとややこしい事になりそうだからやめといた。

青髪もなんか言っつてたが怒鳴られてる俺には聞こえなかった。

あと土御門、お前キャラが変わってるぞ。

そんな風にギャーギャー騒いでいたが、時間が経つとそれも収まっつていた。

で、なんだかんだでもう昼飯の時間帯になった。

「舞夏、今日の昼飯は何だにゃー？」

「カレーだけど、私とアニキだけだと思っつたからそんなに量ないぞー。」

「え、そうなん？ボクも舞夏ちゃんのカレー食べたいわ。なんたつて、本物のメイドさんのカレーやもんなー。」

「俺も食ってみたいな…1人暮らしたと料理するし、出来れば参考にしたい。」

「そう言ってくれるのはありがたいけど…」

「やらん！やらんぜい！このカレーは兄である俺の物にやー！何人たりとも渡さないにやー？」

…このバカアニキがうるさいし…」

全くこのシスコンは…ここまで来るともう救いようがねーな。

でも俺にも意地がある、絶対に食べたい。

…あ、そうだ。

「なあ、実は俺も昨日カレーを作ったんだけど…舞夏のカレーと俺が作ったカレーを分けて食べるってのはどうだ？俺も料理が好きで結構自信があるんだけど自分だけじゃよくわからないからな、この機会に他の人に評価してもらいたいんだが…いいか？」

「ボクは全然それでも構わへんよ。」

「私もそれで構わないぞー。エリートメイドである私が評価してしんぜよう。」

「舞夏のカレーは渡さないのにやー？」

「…カミちゃん、このシスコンを何とかしとくから、はよ取って来いな。」

「その間に私が準備をしてくぞー。」

そう言う2人に俺は頷いて部屋を出る。

靴を踵を踏んづけたまま適当に履いて玄関を出る。隣である俺の部屋に入りすぐにカレーの鍋を温める。

温め終わったカレーを鍋ごと隣に持って行く。

土御門の部屋に戻るともう配膳されており、4人分のご飯とルーを入れるための皿が2つある。1つにはもうルーが注いであった。

「すっげー美味そうないだなー。」

「せやなー、流石はメイドさんやで。」

「ふふん、そうだろうそうだろう、兄としても鼻が高いにやー。」

「これでも一応エリートだからなー。それより早くそのカレーを出してくれ。」

おっと、そうだった。

カレーを皿に注ぐために鍋の蓋を取る。部屋に俺の作ったカレーの匂いも充満する。

プレッシャーを感じた。

突然の事になんだ？と思ってるとうとうやらその発生原は舞夏であるらしい。目がこれでもかかってぐらに見開られていた。

俺が若干気圧されていたら、舞夏がもの凄い速さで動き、気がついたら鍋を掻っ攫われていた。

舞夏はそのままのスピードで皿に均等にカレーを別けると「いただきます?」と言って先に食べ始めてしまった。

「「「「「」」」」」

俺たちは呆然とするしかない。

「…おい土御門、御宅の舞夏さんは一体どうしたんですか?」

「…多分、カミヤんのカレーにメイドか料理人魂を刺激されたんじゃないかにゃー?」

「確かに、カミヤんのカレーもいい匂いしとるしな。」

「…まあ、俺たちもいただきますか?」

それに2人も頷いてくれた。

「いただきます」と言っただけで俺たちも舞夏に遅れて食べ始める。まずは舞夏の作ったカレーから食べる。

「匂いから分かっていたが、本当に美味しいな。店に出してもいけるだろこれ…」

「ボクもそう思うわ。こんな美味しいもんが頻繁に食べられるなんてツツチー羨ましいで…」

「フツハツハツハツ、そうだろう!やはり義妹メイドは最高って事だにゃー!」

「…スルーでいいか？」

「せやな。それよりカミヤんのカレーも食べてみようや。」

「ま、俺の義妹のカレーには敵わないだろうがな。」

そうやって2人は俺のカレーで一口食べる。その間も俺は舞夏のカレーを食べる。使われてる物を考えながらしっかり味わう。とそこで、俺のカレーを食った2人が驚きながら叫んだ

「な、なんだこのカレー？このカレーの美味さは舞夏と同等、いやそれ以上だにやー？」

「メイドの訓練を受けとる舞夏ちゃんより美味しいやなんて、どんな風に料理してんねん？」

「そんなに美味かったか？自分じゃ分からないもんだな…」

そんな風に思っていると、そこまでずっと黙ってガツガツと食べてた舞夏が…

「……………負けた」

…先程の土御門のようにorz状態になって落ち込んでしまった。しかもなんか涙目だ。

「ってカミヤん！舞夏のマイド魂折ってもうて…いや、粉碎してもうてるがな？」

「カミヤん！貴様、俺の義妹を泣かしたな？許さないぜい？」



「なんだ？俺が悪いのか？メイドより不味いものを作らなきゃいけなかったのか？」

理不尽だろう！なんでわざわざ不味い物を作らねばならない！でも、俺が原因らしいしとりあえずは舞夏を慰めなければ…！

「えっと舞夏！なんて言ったらいいのか、えっと…そ、そう！お前のカレー本当に美味かったよ！俺の周りにはこんなに美味しい料理作れる女の子は居なかったから土御門が羨ましいよ！将来いいお嫁さんになれるよ！」

俺は頭を撫でながら言っただけ。俺が土御門に殺される、頼むから泣き止んで？

と念じていると舞夏が多少持ち直した。手を床に付いている状態から上目遣いで見上げてくる。不覚にも可愛いと思ってしまった。

「…本当かー？」

「ああ、本当だ。何なら俺が欲しかったくらいだ。」

「……………／／」

あれ？なんか顔が赤くなってるような…  
そして後ろから凄まじい殺気を感じた。

「上条当麻、殺す…！」

「え、あの土御門さん？口調が変わってますよ？ほ、ほらいつもみ

「たいにかみちゃんって呼んでくれよっ？」

危なっ！こいつ本気だ！本気で殺しに来てる！スプーンの持つ方を目に向かって投げやがった！

俺はただ舞夏を励ましただけじゃん！

ええいとりあえず今は逃げる！

玄関に向かってダッシュしドアを開ける。靴なんか履いてる時間はない。靴下のままアパートを駆け抜ける。

土御門もどうやらそのまま追いかけて来てるようだ。

ああ、この逃亡デスゲームはいつまで続けなければならぬんだろう…と  
りあえず言おう

「不幸だ——！！！！！！！！」

「待て！上条！」

「かみちゃんの鈍感もホンマ救いようがないな…」

「…／／」

side out

side 土御門

かみちゃんの鈍感にはほとほと呆れるぜい。

いつの間にかあの吹寄とフラグが立ってたし？あろう事か俺の義

妹にまでフラグを立てやがったにやー。

ていうかもう、呆れを通り越してむしろ感心したぜい。

エージエントの俺から言わせてもらえば、あのカミヤん病は人心掌握に使えると思った俺は、なかなかに冴えてるんじゃないかにやー？

でももしそれをしたら、片思いに苦しむ男どもが増えるからやめとくにやー。

全く、厄介なのは幻想殺しだけでいいってのにその対の現実殺しまであるし、本当にカミヤんは恐ろしい男だぜい。

でも今は、このリアル鬼ごっこに全力を注ぐとするかにやー。

side out

side 舞夏

ゴールデンウィークになったしー、私はアニキの所にご飯を作りに行った。けれどアパートにはアニキがいなかったんだぞー。

だからアニキから貰ってたスピアの鍵を使って中に入って待ってたんだぞー。

暫くしてアニキは帰ってきたけどアニキは友達を2人連れて来たんだー。

上条当麻と青髪ピアスって言うらしいな！。

自己紹介を簡単にやって適当に喋ってたらもう昼ご飯になってたんだ！。メニューはカレーだったけど、量がそんなになくて困ってたんだ！。

そしたら上条当麻が自分で作ったカレーを持って来るって言うから、私は評価してやろうと軽い気持ちでいたんだ！。

驚愕した。

料理の指導なんか受けてなんかなさそーなのに、私よりも全然美味かったんだ！。

エリートとしてメイド魂を砕かれたね！。

「えつと舞夏！なんて言ったらいいの、えつとー…そ、そう！お前のカレー本当に美味かったよ！俺の周りにはこんなに美味しい料理作れる女の子は居なかったから土御門が羨ましいよ！将来いいお嫁さんになれるよ！」

上条当麻は必死に慰めてくれて、私にも嬉しい事を言ってくれた！。

多少立ち直る事が出来たな！。

「…本当かー？」

「ああ、本当だ。何なら俺が欲しかったくらいだ。」

前のやり取りで上条当麻を少し良いかなーなんて思ってた私にこれは効いたね！。多分、赤面してたな！。

アニキと同じくらいかそれ以上に良いと思ったよー。

お嫁の話があっただけど、その前にまずー、上条当麻の味を超えねばなるまいなー。

上条当麻、貴様は私の中の眠れる獅子を目覚めさしてしまったのだよー。

絶対超えてやるから、

これから覚悟しろよー！

## ゴールデンウィーク、時々フラグ（後書き）

なんかすんませんでした。

これは正直作ってて投稿しようか悩みました。

私的にはこの作品ではとことんハーレムを目指してるつもりなのですが、

これはいいのか？

と思ってしまった。

余りに不評なら何かしようと思っっています。

さて、前回の吹寄と同様、いやそれよりもやっちゃまった感がやばいです。

一応この小説での土御門舞夏のコンセプトはアニキは好き、しかし当麻が好き、感情表現が原作よりは豊かという感じですが。

気に入っていただけたらいいのですが…まあそれは諦めます。

次回こそはビリビリします。

今後よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9247z/>

---

俺が理想の主人公 -魔術と科学編-

2012年1月4日03時45分発行